こころの友
定価32円（本体30円）〒60円
雑誌03753-11
点字版もあります（年間購読料600円）
日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-41 TEL.03-3204-0427
Visual Communication Design Convivia
印刷所 文唱堂印刷（株）
2010 11

撮影・御澤 徹

生きてきた街で最後のときを

在宅ホスピスケア施設長
山本雅基 さん

やまもと まさき　東京都台東区在住。1995年上智大学神学部を卒業後、NPO法人「ファミリーハウス」の事務局長を務める。2001年よりホームレスのためのホスピスを建てようと看護師の妻とともに活動を開始し、2002年10月に「きぼうのいえ」を開設した。
〒111-0022 東京都台東区清川2-29-12　TEL. 03-3875-7523
URL: http://www.kibounoie.info/

山本さんが身寄りや行き場のない人たちのために山谷にホスピス「きぼうのいえ」を設立したのは二〇〇二年十月のこと。山谷といえば、日雇い労働者たちの多くがかつて暮らしていた街。最近は不況や高齢化に伴い、生活保護を受けてドヤ（簡易宿泊所）で暮らす人が増え、多くのドヤが格安ホテルに鞍替えし、界隈には外国人旅行者やサラリーマン、外国人住民の姿もめずらしくなくなってきた。

今年一月に山本さんは「きぼうのいえ」での涙と笑いの八年間を綴った『山谷でホスピスやってます。』を出版。これまで一一八名の看取りをしてきた。「きつい人生を送ってきた人たちですから、死をあまり恐れていません。感謝しつつ、喜んで死を迎える人もいるくらいです。僕たちは彼らから『生ける死生学』を学んでいます」と山本さん。

とにかく「人のために」という気持ちが先んじる山本さんは大学時代は院内学級でのボランティアに励み、その後生涯、人に仕える神父になろうと修道院に入った。しかし、すぐに社会的な活動ができないことにジレンマを感じ、小児がんなどの難病を抱えた子どもの家族のための宿泊施設「ファミリーハウス」をつくるNPO活動に奔走した。

しかし、組織の上層部と考え方の違いから対立して、その活動からは身を引くことになる。生きる道を模索する最中にうつ状態になり、アル中にも陥った。立ち直るにはアルコールを遠ざけるために打ち込めるものが必要だった。それがホスピスだったという。

「『きぼうのいえ』は僕が自己治癒のために建てたといっても過言ではありません」。

「きぼうのいえ」はよくマザー・テレサの「死を待つ人の家」の日本版に例えられるが、特に意識しているわけではないと山本さんは言う。

「ここは死を待つ所ではありません。もし不幸に見舞われなかったら、こうなりたかった、という自分をここで再現する。最後の数か月かもしれない。それでもここは生き抜くためのホスピスなんです」。

しかし、「きぼうのいえ」に入居できる人はごくわずか。山本さんは五年前に近隣にヘルパーステーションを開設、四〇名のヘルパーを主にドヤ暮らしの人たちのところに派遣し始めた。また、妻が戸外で小耳にはさんだ「俺たちは死んでもホームレスだよな」という嘆きを放っておけないと、「きぼうのいえ」の共同墓地を購入、希望者は誰でも入れるように炊き出しの列に並ぶホームレスたちに「ドナーカード」を配っている。

山谷で暮らす人たちの霊魂を今生から来世へ橋渡しする、言ってみれば天上への通路としての役割も神さまから与えられたと山本さんは言う。

「やがては山谷を聖地にすること、それが僕のミッションだと思っています」。